

## 序説

編集 順天堂大学医学部 放射線診断学 桑鶴良平

画像診断機器の開発，診断能の向上，新たな疾患概念の出現，疾患概念の変化などにより，アップデートした臨床に即した画像診断が多くの臓器の病変で求められている。一方で画像診断における各自の専門分野の細分化により，同じ放射線診断専門医でも領域による診断能に差があるのが現実で，腹部を専門とする放射線診断専門医の胸部領域の読影は，胸部を専門とする放射線診断専門医から見ると物足りない点があり，逆もまたしかり，である。腹部のなかでもさらに細分化され，肝臓専門，腎臓専門といったその領域の専門医による読影は，同じ腹部の専門医でもその分野のスペシャリストでない場合，優れたものと感じる次第である。また，高い専門性も大切であるが，日々の読影で専門の領域だけを読影できる放射線診断専門医は少ないと思われ，放射線診断専門医が自分の専門外の領域の読影時にも本増刊号を活用して，忘れていた知識や新たな知識を得て，読影能力の再構築に役立てていただきたいと思っている。

専門医が自身の各領域における診断能を上げるのは当然であるが，放射線科研修医の教育も専門医の使命である。研修医にとっては学ばなければならない多くの知識，技術があるため，より効率的に臨床の現場で必須の画像診断を学ぶという点に主眼を置いて今回の増刊号を企画した。放射線科研修医の皆さんには，本増刊号を手にとってまず一気に読破することをお勧めする。そして読影時に傍らに置き，CTで胸部に限局性の浸潤影を見てどう考えるかという場合，本号の該当する章を再度読んで概略をつかみ，「次取るべきアクション」が書かれている場合は，参考にしていただければと思っている。さらに深い知識を得たい場合は成書やインターネットで最新の情報を得ていただきたい。

今回の特集は，各分野の専門医に執筆をお願いし，基本的内容から伝えたい専門的な内容の一部を記載していただいた。著者による思いのバラツキはあるが，「病変のパターンによる記載」や「次取るべきアクション」など編者の無理なお願いに対応していただき感謝している次第である。

増加し続ける知識を集積してパターンから回答するAIに，やがて画像診断の多くが取って代わられるとしても，AIでは伝えられない個々の専門医の経験に基づく機微な診断や他科の医師とのコミュニケーションを良好に保つ能力により，放射線診断専門医の存在価値が今後ますます上がっていくと個人的には確信している。